# 2024年度学生による前期授業評価アンケートへの

# 教員からのコメント

■稚内本校 基礎演習 II/小林 伸行、佐藤 結花、松坂 公暉、伊藤 良平

受講者 10 名に対して回答が 11 件となっており、必ずしも正確な回答率を反映していないことが伺える結果となりました。
前期の「基礎演習Ⅰ」と比べて、授業の難易度を尋ねた設問６では、「とても難しかった」が 12.5→30%、「難しかった」が 75→10%、「適切だった」が 12.5→50%、「易しかった」が 0→10%と推移しており、概ね適度な難易度に修正できたものの、一部に軟化したと感じる人もいる「二極化」傾向が浮き彫りになりました。
ただ、授業全体をよく理解できたか尋ねた設問 14 では、「強くそう思う」が 0→10%、「そう思う」が 62.5→70%、「どちらとも言えない」が 25→20%、「そう思わない」が 12.5→0%となっており、全体としては適正化できた傾向が示唆されます。したがって、一定程度、前期の反省・対策を行った効果が現れたものと思われます。

主な課題としては、設問 17 の「難しいと思った課題の内容」（複数回答）に対して、回答 1「（学祭準備やグループワーク中の）協働作業・学生間のコミュニケーション」が 80%と圧倒的な割合になったことが挙げられます。
これは恐らく、高校時代のコロナ禍（や不登校、通信制の環境など）の影響もあって、対面状況でのグループワークや協働作業の経験自体が少なく、もともと苦手意識の強い学生が多かった点も挙げられると考えられます。実際、授業への感想・意見を尋ねた設問 19 で「学園祭でコミュニケーションの大切さを再確認することができました。」という回答や、授業での学びや反省を尋ねた設問 20 で「コミュニケーションの大切さ。」という回答が見られました。

前述の通り、授業の難易度を尋ねた設問６で一部に二極化傾向が見られたのも、学園祭などで、学生間でコミュニケーションを取りながら協働作業を進めることに苦手意識を抱いた学生にとっては非常に難しい課題に取り組んだイメージが強く残ったためと推測されます。

よって、コロナ禍の影響が残る間は、通常の対策に加えて世代的な特殊性も加味した対策が必要になる可能性も示唆されます。
なお、授業に対する要望・リクエストを尋ねた設問 18 で「発表最終だけじゃなくて、もっと実践させてほしいです。」という回答があった点を踏まえ、対策として来年度は、発表練習の機会を増やす予定です。